

「さじ」と「スプーン」：外来語化と命名のゆれ

陣内, 正敬
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/4295>

出版情報：言語文化論究. 4, pp.47-54, 1993-02-19. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：



「さじ」と「スプーン」：外来語化と命名のゆれ

陣内正敬

1. はじめに

われわれの言語使用というものは、厳密に言えばその一回一回が転用ないし比喩である。これはことばとそれが指す指示物との関係が、「意味の三角形」(Ogden & Richards : 1923)として捉えられたように、間接的な仕方、つまり「概念」というフィルターを通して結びついているということから来る。ある物事を呼ぼうとした時に、我々はその物事の特徴を見定め、レキシコンの中に存在するある「概念」と照合し、最もふさわしい「概念」を選び出し、それに付属している音声ないし文字を発したり書いたりするというプロセスを繰り返しているわけである。従って感覚器官で見えているものはたとえ同一であっても、それをどう名づけるかについては、「概念」の違いによりひとりひとり異なってくる可能性がある。

さて最近の日本語の顕著な現象のひとつとして外来語化が挙げられるが、これには大きく次の2種類のタイプが考えられる。(なお小論で用いる「外来語」という用語は、主に西洋から借用したカタカナ語のことを指す。)

(1) 新物新語としての外来語

(2) 旧物新語としての外来語

(1)は新しい物や概念が導入される際に、原語で呼ばれていた名前をそのまま借用する様式である。もちろん日本語化に際しては若干の音声変容が伴う。また日本語化した結果、あまり長くなる語については、例えば「セク

シュアルハラスメント」→「セクハラ」, 「アメリカンフットボール」→「アメフト」～「アメフット」のように省略がなされたりもする。

(2)は和語、漢語など由来の非カタカナ語が当てられていた物事に、新たに外来語を与えるような場合である。この中には以前には翻訳借用による造語や在来語の転用などで対処されていたものが、新しい感じを出すためなどの理由からカタカナ語に置き換えられるケースもある。「ぶどう酒」→「ワイン」, 「写真機」→「カメラ」, 「帳面」→「ノート」など挙げればきりが無い。しかもここに挙げた例は少なくとも30年前はいずれも前者(非カタカナ語)が一般的であり、かつ現在では死語に近いくらい使われていないわけであるから、かなり急激な取り換えが行なわれていると言える。

さて語の取り換えが行なわれる際には、一般的にある期間新旧両語の併存がみられ、ここでは両語に様々なニュアンスの違いを感じる。いわば“同じものを言う時に違った表現方法がある”というわけである。それは指示物そのものをどのように認識しているかはもちろん、話し相手が誰であるかやどのような場面でそれが話題になっているのかなど、諸々の要因が絡み合っただけでその場にふさわしい選択がなされることになる。

小論の目的は、このような語の取り換え時に見られる新旧両語の意味領域の違いや文体的意味の差異などについて、「さじ」と「スプーン」にその具体的事例を求め、言語変異、言語変化の一断面を明らかにすることにある。

2. 「さじ」と「スプーン」

2.2. 指示物の「属性」による命名のゆれ

2.1. 「さじ」から「スプーン」へ

NHK(1979)には「さじ」と「スプーン」のどちらを使うかという質問をした全国的調査ある。表1はその結果である。

表から明らかなように、「さじ」から「スプーン」への世代的变化が明瞭に観察される。因みに、筆者の住む福岡市においてもほぼ同様の傾向が見られた。1992年夏、福岡市博多区の生え抜き40名(60歳以上, 40~59歳, 20~39歳, 10代の4つの年齢層各10名ずつ)に対し、図1の第3番のもの(実物)を示して「さじ」か「スプーン」かを問うた。表2がその結果である。代代的推移はあるものの、NHK調査ほどには顕著でないのは、福岡市調査のインフォーマントがいわゆる旧博多部生え抜きの比較的強く方言ないし従来のことばを残していたためと思われる。

このように、ある言語共同体で同一物を指すのに複数の名称が存在する際には、その指示物と同一種類と見なせるような類似物に対しても、様々な命名上のゆれが観察されるであろうと思われる。

そこで図1に示した12個のものについて、「さじ」か「スプーン」か(あるいは「その他」)を問う調査を行なった。これら12種類のもは、形状(形, 大きさ), 材質(金属, プラスチック, 木, 陶器), 用途(計量用, 取り分け用 etc), などの基準で選んだものであるが, アンケート調査という性格上多くの種類について調べられなかったのが残念である。インフォーマントは福岡市のある日本語教師養成学校に通う20代, 30代, 40代の女性各18人。調査の形態は, 筆者(調査者)が実物をひとつずつ見せながら, 各サンプルの紹介を表3に示したような形で口頭で行なった。なお使用場面としては, “家庭の中で”ということに一応限定した。またアンケート

表1. 「さじ」, 「スプーン」のどちらを使うか(年齢別, %)

	全	16	20	25	30	35	40	50	60	70
		}	}	}	}	}	}	}	}	}
	体	19	24	29	34	39	49	59	69	
「さじ」	29.9	15.4	12.9	18.3	17.2	20.7	32.3	39.8	49.8	67.5
「スプーン」	63.6	81.1	81.9	75.6	76.1	74.7	59.6	52.9	42.3	25.3
両方	6.4	3.5	5.3	6.1	6.8	4.3	8.1	7.3	7.5	6.6
無回答ほか	0.1	0	0	0	0	0.3	0	0	0.4	0.6

石綿(1985)より転載

表2. 「さじ」, 「スプーン」どちらを使うか(1992, 福岡市博多地区調査40名)

年齢層	60歳~ (10人)	40~59歳 (10人)	20~39歳 (10人)	10代 (10人)	計
「さじ」	9	8	7	6	30
「スプーン」	4	4	3	7	18

数値は実数, 重複回答可

票には“自由記入欄”を設け、その呼び分けに関し、場面を限定せずに、自由に意見を述べてもらった。以下表4（調査の集計結果）にもとづいて、また自由記入欄の意見も参考にしながらいくつかの傾向を指摘してみる。

サンプル番号①～⑤までの回答によれば、少なくとも材質が金属であれば、大きさには関係なく「スプーン」が優勢であり、このように内省するケースが多かった。ただ大きさに関して、一般的傾向は見られなかったものの、大き目のものを積極的に「スプーン」とするものは皆無であったことを考えると、「スプーン」についてはどちらかと言うと小さ目

のものがよりふさわしいという印象を得た。30代の「さじ」に対する回答が、消極的にはあるが、そのことを表わしている。また国語辞典には一般に、⑥のような小さ目のものを「茶さじ」として挙げてあるが、今回の調査では「ティースプーン」というのはあっても「茶さじ」という名称はなかった。参考程度に60代の女性を数人調べた中に一人いたくらいで、もはやこの語は廃語化の様相を呈しているようである。

⑥の計量用（プラスチック製）については、30代、40代において、①～⑤に比べ「さじ」が若干増加している。材質と用途のいずれが

表3. 各サンプル（図1）の紹介

番号	大きさ	材 質	用 途
①	大	金属（ステンレス）	取り分け用（大皿→小皿）
②	大	〃	口へ運ぶため（カレーライス、スープなど）
③	中	〃	〃 ， かきまぜ用
④	中	〃（柄の部分は木）	〃（アイスクリーム、パバロアなど）
⑤	小	〃	すくい取り、かきまぜ用（コーヒー、紅茶など）
⑥	中	プラスチック	計量用（粉ミルクなど）
⑦	小	〃	口へ運ぶため（水ようかん、プリンなど）
⑧	小	木	〃（カップ入りアイスクリームなど）
⑨	大	プラスチック	取り分け用、かきまぜ用（お粥、サラダなど）
⑩	大	〃	取り分け用（サラダなど）
⑪	大	〃	〃（ 〃 ）
⑫	中	陶器	口へ運ぶため（チャンポン、ラーメン、チャーハンなど）

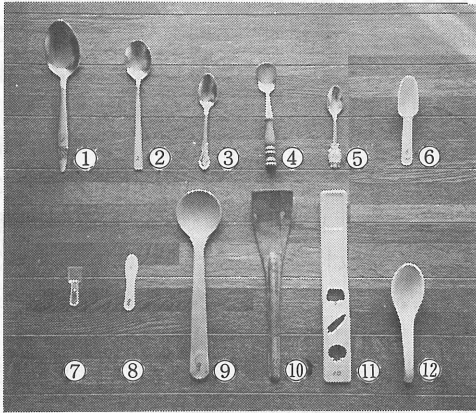


図1. 調査用サンプル

その差をもたらしたのかは数値だけでは判断できないが、自由記入欄の内省によればどちらも効いている可能性が高いようである。前述したように、「スプーン」の材質としては金属がふさわしいとする意見が多かったことと、「計量スプーン」としては「大きじ」、「小さじ」などを用いるから「さじ」になりやすいとするものがあつたことなどによる。ある回答によれば、⑥を除き全て「スプーン」であり、これは「計る」という用途のみが「さ

じ」と結びつくという内省であつた。いずれにしる①～⑤は世代を問わず「スプーン」の典型と見なされ、「金属（ステンレス）」で図のような形であることが最もふさわしい条件となっている。

これに対し、⑦、⑧は材質がプラスチックや木であること、形状がいわゆる「スプーン」、「さじ」のイメージ（①～⑤など）からはずれることなどにより、回答に大きなゆれが見られた。しかしながら、このような、ある語の“周辺の指示物”に対しどのような命名がなされるかを見ることは、その物がどのような枠で捉えられているのかを知ったり、逆にその枠づけの基となった語の意味を具体的な実例によって検討することを可能にしてくれるという点で興味深い。さて表4によれば、どの世代でも「スプーン」が減り、「さじ」が増加している。これは先程述べたような典型的スプーン像からはずれる分、対抗相手の「さじ」が用いられた結果である。ただし、これには顕著な世代差が見られる。30・40代では「さじ」が多く、20代では①～⑥よりは差が縮まるが相変わらず「スプーン」の方が

表4. 「さじ」「スプーン」の世代別集計（1992年福岡市（48名）、数値は実数、重複回答可）

世代 サンプル	20代（18人）		30代（18人）		40代（18人）	
	さ じ	スプーン	さ じ	スプーン	さ じ	スプーン
①	3	16	9	15	5	17
②	5	17	4	18	4	17
③	4	18	5	17	6	16
④	3	17	4	17	4	16
⑤	4	16	3	15	3	17
⑥	4	15	10	10	6	12
⑦	7	14	8	7	12	9
⑧	8	13	13	4	12	6
⑨	2	8	4	7	3	7
⑩	1	2	0	3	0	0
⑪	1	3	2	2	0	3
⑫	1	4	3	3	6	2

多い。“食べ物（すくい）取って口へ運ぶためのもの”という概念の意味領域に対して、20代ではその指示物の材質、形状に関わらず「スプーン」を与える傾向が強い、即ちこの意味領域に関しては、「スプーン」の方が無標（unmarked）となっていることが伺える。一方30・40代で「さじ」が多いということは、逆に「さじ」が無標、あるいは「さじ」と「スプーン」がある程度区別されていることを推察させるものである。おそらく上の世代では「さじ」が完全に無標であり、そのような場合には、「さじ」という語と共に、「洋さじ」、「金さじ」などの語があったとしてもおかしくはない。逆に20代以降の若い世代では周辺的なスプーンを、例えば、「和風スプーン」や「木のスプーン」などと呼ぶことがあっても不自然ではない。

さらに30・40代において、⑧より⑦の方に「スプーン」が多いのは、「スプーン」の材質に関して、どちらかと言えば木よりはプラスチックの方がふさわしいからであろうと思われる。

なお⑦、⑧に対する名称としては、「さじ」、「スプーン」以外に以下のようなものがあつた。

⑦：ミニスプーン、おまけのスプーン、ちっちゃなスコップ、プラスチックのさじ、かわいいさじ、スティック

⑧：アイスクリームスプーン、アイススプーン、木のスプーン、ヘラ、(アイスクリームの)スティック

⑨～⑫は、⑦、⑧よりもさらに周辺的な指示物と思われ、「さじ」、「スプーン」以外の語のカバーする範囲となっていたり、そのものに固有の名称が与えられない（以下の実例参照）といった結果が見られた。まず⑨については、形状が「さじ」、「スプーン」に近いこともあって、この4者の中では最も多く両名称のいずれかが与えられている。「さじ」より「スプーン」が若干多いのは、材質がプ

ラスチックで形も①や②と似ているからであろうか。⑨に対する他の名称としては以下のようなものがあつた。

⑨：しゃくし、おたま、木じゃくし、おしゃもじ、サラダスプーン、サラダ取り、木のおたま、木のさじ、すくうの、つぐもの、サーバー

この中には、お粥や汁ものなどをすくう時には「おたま」、サラダなど洋風の料理を取り分ける時ならば「サーバー」というように、同一物に対し、“出現場面”により使い分けるといふものも見られた（後述）。

⑩、⑪は、形状からは命名が困難と見えて、その物の機能から「サーバー」（取り分けるためのもの）、「取りもの」、「すくうもの」、「取りさじ」、「つぐやつ」などがあつた。もちろん形状から、「黄色いの」、「棒みたいなの」、「へら」、「取りべら」などの名称も見られた。

⑫は「れんげ」という名称を知っている場合はそれに決定される傾向が強いが、これを知らない場合には、「さじ」と「スプーン」の出方に世代差が見られる（表4）。材質が陶器ということと、このものの出現場面が、中華料理やうどんなど、非洋風であることなどが、30・40代において、「さじ」の方が上回っている要因であろう。

以上①～⑫まで、そのものが固有に持っている形状、材質、あるいは機能、用途などから「さじ」か「スプーン」かを検討して来た。しかしながら語の意味というものは、最終的にはそれが使われる文脈や場面を離れては語れない。例えば、みかん箱（つまり本来はその中にみかんを詰めるための箱）も、それが部屋の中で仕事をする台となれば「机」とも呼べるし、テーブルクロスをかけ、食べ物を置けば「テーブル」ともなりうるのである。次節では①～⑫までが実際に現れる「出現場面」と命名との関わりについて、アンケートの自由記入欄に見られる内省をもとに考察してゆく。

2.3. 指示物の「出現場面」による命名のゆれ

「出現場面」には大きく次の3つのことが考えられる。これらは「さじ」と「スプーン」の文体的意味の差異に関わってくる要素である。

- (a) 出現場面1：それで何をあるいは、どういう料理を取ったり、食べたりするのかという“料理環境”
- (b) 〃 2：誰と話しをしている時にそれに言及するのかという“対人環境”
- (c) 〃 3：どこでそれが言及されるのかという“場所環境”

まず(a)“料理環境”については、洋食・洋風環境には「スプーン」、和食・和風環境には「さじ」という傾向がある。同一の家庭で同一物を指す場合でも、スープ、シチュー、コーヒー、プリンなど一般にカタカナで書かれる外来物と一緒にあれば「スプーン」、逆に、鍋物、おでん、茶碗蒸し、水ようかんなど和風環境に出現すれば「さじ」というように使い分けられることもあるようである。また料理環境と連動して、そこにフォークがあるか「箸」があるかということも考慮しながら呼び分けることもありうる。自由記入欄の内省報告を2例紹介しておく。

- ・⑨に対し、煮豆を作っていれば「さじ」、シチューであれば「スプーン」
- ・4に対しては普段は「おさじ」であるが、アイスクリームがしゃれたカットグラスに入っていて、それを食べるような場合だったら「スプーン」

このようなことは、指示物はその回りにあるいろいろなものとの関係によって捉えられ、命名されているということを実感させてくれる現象である。

“対人環境”については、話し相手の年齢層による使い分けが比較的明瞭であった。これは「さじ」、「スプーン」使用の世代差を反映したものであり、年輩者に対しては「さじ」、若年層に対しては「スプーン」である。内省報告として次のようなものがあった。

- ・おばあちゃんに言う時には、たとえその場での瞬間的判断としては「スプーン」であっても、相手を考慮して「さじ」に変えているようだ。(20代女性)
- ・自分はほとんど「おさじ」であるが、子供が「スプーン」を使うのでそれに同化されることがある。(40代女性)

“場所環境”については、家庭の中か外かにより若干の違いが出てくるようである。20～40代の回答としては、前者が「さじ」、後者が「スプーン」というのが一般的傾向である。これは日本語一般に見られるウチ／ソトによることばの使い分けとも対応したものであり、「スプーン」は「さじ」に比べ、“少し気取った”、“改まった”ニュアンスを持つものとして意識されていることを伺わせる。これは「スプーン」が“洋風”と結びつくからであり、このような在来語とカタカナ語が共存している際には広く見られることである。

3. 使い分けの記述

これまで「さじ」と「スプーン」の使い分けに関して、指示物の属性による違い、使用者、使用場面による違いなどについてアンケート調査をもとに見て来たが、この中で使い分けの要因として考えられるものと、その様相を示せば図2のようになる。

この図は高々50人弱の内省をまとめたものであり、言うまでもなく十分な記述とはなっていない。例えば〈対人環境〉として年齢的なもののみを入れたが、実際には年齢よりも相手のライフスタイルや志向性をどのように捉えているかということの方が、使い分けに

〈要因〉		←		→	
		スプーン		さじ	
属性	〈大 き さ〉	(小)			
	〈材 質〉	金属	プラスチック	陶器	木 竹
使用 場面	〈機 能〉	(計量用)			
	〈料理環境〉	洋		和	
	〈対人環境〉	若年	中年	高年	
	〈場所環境〉	外：フォーマル		内：インフォーマル	
	〈使用 者〉	若年	中年	高年	
※ () 内は弱い傾向のもの					

図2. 「さじ」「スプーン」使い分けの要因と様相 (20代～40代女性)

効いて来る場合もあるであろう。ともあれ、年齢的推移のみでは語れない「さじ」と「スプーン」の使い分けの相がいくつか見えて来たことは確かであろう。

4. おわりに

人間は物や現象をカテゴライズする能力を持ち、それに何らかの名づけをする。ある語の持つ概念にぴったり合う物事を指す場合には問題がないが、どの語にも当てはまりにくい周辺のなものについては、その変異の中に命名行為そのものが浮かび上がってくる。

例えばドライアイスや冷凍庫から出る白い冷たい気体は「けむり」と言ってよいのかとか、リニアモーターカーは「走る」のか、「飛ぶ」のか、「滑る」のかなど、命名(カテゴライズ)にゆれの見られる新物、新現象などを観察すると、命名行為の何たるかがよくわ

かる。小論で扱った「さじ」と「スプーン」の使い分けについても、図1の⑦、⑧のような周辺の物に対する命名を知ることによって、そのものがどちらにカテゴライズされているか、あるいはいずれでもない他の語の枠として捉えられたかなどがわかる。人は“概念”でもって物事を見ており、新しい経験は常に何らかの枠と与えられ意味づけされているのである。

謝辞：小論の資料となったアンケート調査に心よくご協力戴いた福岡YMCA日本語教師養成講座受講者の皆さんに感謝申し上げます。

なおこの研究の一部は、平成4年度文部省科学研究費補助金、一般研究(c)「地方中核都市における言語変容の実態と地域言語の将来—福岡市、北九州市及び両都市間地域—」(研究代表者：陣内正敬)により行なわれた。

参 考 文 献

- 石綿 敏雄 1985『日本語の中の外国語』 岩波書店
Ogden, C. K. and I. A. Richards. 1923 *The Meaning of Meaning*, London.

Saji or *Supuun* : A Study on Variation in Denomination Caused by Loan Words

Masataka Jinnouchi

A questionnaire survey with regard to the usage of *Saji* (native word) and *Supuun* (loan word) for the same referent was conducted on 48 female informants of various age groups. They were asked to select between these two terms when describing 12 spoons (cf. figure 1) which differed in shape, size, quality, and function, by taking into account several different situations in which they might appear.

It was found that, although there was a certain amount of individual and generational difference, the conditions and the situations in which *Supuun* was dominant were as follows.

- (1) If it were smaller,
- (2) if it were made of metal rather than wood, bamboo, or plastic,
- (3) if it appeared in western rather than Japanese dishes,
- (4) if it were labelled by younger people,
- (5) if it were labelled in formal rather than informal situations.